

〔公開講演〕

岐阜経済大学学会 公開講演会

## 「現代フェミニズムと女性労働」

講師 安川悦子氏

(名古屋市立女子短期大学教授 経済学博士)

\*以下は、1993年6月21日(月)に行なわれた学会公開講演会の内容を、講師・安川悦子氏の許可を得て収録したものです。なお、編集上の責任は、本誌編集委員会にあります。

### 講演会レジュメ

#### I 歴史の中の現代——「革命の時代」

\* 「見える革命」と「見えざる革命」と

(1) 二つの革命・1989年

フランス革命二百年と天安門・ベルリン・ティミショアラ→人権をもとめて

(2) 資本主義諸国における「見えざる革命」Subtle Revolution

・個別企業の中での革命→技術革新にもとづく労働過程と労働市場の変化  
ロボット化の進行と「労働力の女性化」

・産業構造の変化と労働力の再生産システム・「家族」の変化

矛盾のなかの「サザエさん」一家

『妻たちの思秋期』(1982)から「妻たちの定年」「夫無用論」(1989)へ  
「1.50ショック」と出生率の低下

(3) 「見えざる革命」の提起するもの

・フランス革命の人権宣言(1789)から「女子差別撤廃条約」(1979)へ

・労働の質の変化と労働観の変化

・人権としての労働権

・労働における男女の平等

- ・子育ての男女平等と社会の責任

## II 現代フェミニズムの展開——「見えざる革命」をささえる思想

### \* フェミニズム二百年・1992年

——グーージュとウルストンクラフトから現代フェミニズムへ

#### (1) 第1段階 1960年代—1970年代

- ・女性の居場所としての「家族」の構造分析→「家父長制」の析出  
性別役割分業の批判  
ベティ・フリーダンとジュリエット・ミッチェル  
ミッチェル「女性——最も長期にわたる革命」(1966)
- ・主として社会学を足場にして、女性の領域の構造分析
- ・家事労働の経済学的意味や母性・セクシャリティなどがテーマになる

#### (2) 第2段階 1970年代末—1980年代

- ・女性労働の存在構造と性別職務分離の問題が分析される→パートタイマー化  
ヴェロニカ・ビーチ、ミシェル・バレットらの仕事
- ・家族賃金のセクシズム・イデオロギー批判
- ・資本と労働の再生産構造の分析とこの再生産過程をとおしての家族の解体  
家事労働の社会化への道

#### (3) 現代フェミニズムが到達した地平

- ・性別役割分業の構造と性別職務分離の構造の密接な関係を明らかにしたこと
- ・モデル労働者像の転回→熟練男性労働者から不熟練女性パートタイマーへ  
「家族」の解体と自立した個人の生活、そして子どもの社会化
- ・社会科学のパラダイム転換へ  
社会の基本単位を「家族」から「個人」へ……社会保障、法律の体系の変化

## III 「見えざる革命」が切り開く地平——21世紀への展望

### \* 人権としての労働権の確立

### \* 労働の質の変化と労働観の転回

- ・労働は富であり、自立の基礎であること
- ・労働の平等と労働の成果の平等にむけて……女性も高齢者も障害者も働いて生きる社会システムの可能性
- ・労働は発達であり、喜びであること
- ・労働が仲間づくりであること……分業と協業のシステムのあり方

以上

〔文献目録〕

- ① 斎藤茂男『妻たちの思秋期』共同通信社, 1982
- ② 加藤寛『経済は変わった——不況を生き抜く発想と戦略』日本経済新聞社, 1987
- ③ 鹿島敬『男と女 変わる力学——家庭・企業・社会』岩波新書, 1989
- ④ Betty Friedan, *The Feminine Mystique*, New York, 1963  
三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房, 1981
- ⑤ Juliet Mitchel, *Woman's Estate*, Harmondsworth, 1971  
佐野健治訳『女性論, 性と社会主義』合同出版, 1973
- ⑥ Juliet Mitchel, *Psychoanalysis and Feminism*, London, 1974  
上田昊訳『精神分析と女の解放』合同出版, 1977
- ⑦ Kate Millett, *Sexual Politics*, New York, 1969  
藤枝滯子他訳『性の政治学』ドメス出版, 1985
- ⑧ Shulamith Firestone, *The Dialectic of Sex, The Case for Feminist Revolution*, New York, 1971  
林弘子訳『性の弁証法』評論社, 1972
- ⑨ Michelle Barrett and Mary McIntosh, *The Anti-social Family*, London, 1982
- ⑩ Veronica Beechey, *Unequal Work*, London, 1987  
高島道枝・安川悦子訳『現代フェミニズムと女性労働』中央大学出版, 1993
- ⑪ 高橋正立『生活世界の再生産——経済本質論序説』ミネルヴァ書房, 1988
- ⑫ Jane Jenson, Elisabeth Hagen and Ceallaigh Reddy, eds., *Feminization of the Labour Force, Paradoxes and Promises*, Oxford, 1988
- ⑬ 水田珠枝・中田照子・安川悦子他共著『女性の解放 社会の解放』ユニテ, 1993

## I 歴史の中の現代

### ——「革命の時代」

こんにちは。ご紹介いただきました安川です。これだけたくさんの皆さん方を前にしてお話しするなどという機会は、私にはめったになくて、大学では、1年生, 2年生合せて520人という, そういう小さな大学で数十人を相手にお話ししておりますので, 少しばかり気おくれがしております。今日ここへ伺いまして先ほど学長先生に, この大学で女子学生はどのぐらいいるのですかと聞きましたら, 全体の3%ぐらいだとうかがいました。私は相当び

っくりしました。経済学というのは、最近、女子学生にとっても人気のある学問であります。昔は家政学だとかそういうものに人気があったのですけれども、今や経済学部で女子学生が増えて困っているという話をきいておりました。まだまだそうではない、男の学部である大学があるのだということを知りました。

早速ですがレジュメを配りました。それに沿ってお話しをしたいと思います。先ほどご紹介がありましたように、フェミニズムというのは、男性が女の子を大切にすればいいんだというような思想ではなくて、一つの思想の体系として現われてきました。大きく言うとこの10年くらいの間に、世界で、日本だけではなくて世界で広がりはじめています。一つの大きな思想の流れとして、マルクス主義という思想がありますが、そういうマルクス主義と匹敵するなんて言うと、怒られそうですけれども、そういう意味合いでの一つの大きな思想として登場してきつつある。そして、私の今日の講演でしようとするお話しの最後の結論を先に申し上げてしまいますと、21世紀、もうあと、何年か、7年たちますと21世紀であります、フェミニズムは、21世紀を切り開く思想の一つである、と申し上げるつもりであります。

まず、今、現代は一体どういう時代かということであります。皆さん方はこの問題について毎日毎日講義を聞いたり、あるいはテレビで見たり、いろんな新聞を読んだりしていろいろお考えだろうと思います。私はちょうど、この1980年代から90年代にかけてであります、「革命の時代」だというふうに思います。事実、1989年、今からもう4年前になりますか、この年はとても面白い年でありました。皆さん方は、年をとって孫ができた頃あたりには、おじいちゃん、あるいは、おばあちゃんはその時代に生きてたんだよ、大学へ行ってたんだよ、あるいは、高校時代で受験の勉強してたんだよというふうに若い人たちに誇らしげに言うことになる、この、記念すべき年であるだろうというふうに私は思います。どうしてかって言いますと、この1989年という年は革命の年であるからです。まさに革命を、いながらにし

てテレビでウォッチングできた年でありました。皆さん方はフランス革命だ、イギリス革命だって、きっと、歴史の教科書や先生から習ったわけですが、ウォッチングができる、つまり目のまえで見ることができるなんていうのはこれまでなかった。目の当たりにです、ヴァーチャル・リアリティで見ることができるなんていうのは、この年以外にはなかった、この年以外にはなかったんじゃないかと、この年は最もよく見られた年でありました。

これが、目に見える革命であります。何かって言いますと、1989年っていう年は、天安門事件に始まりまして、中国の、あの天安門ですね、5月末から6月にかけて、あの大量の群衆の中で何人かが死んだという、あの天安門事件から始まりまして、ベルリンの壁があっという間に壊され、あるいはルーマニアの大統領、独裁を振っていた大統領が銃殺され、天安門、ベルリン、ティモショアラという、まあ、こういう言葉で書き表わすことができるような、そして、いながらにして、群衆がわーっと集まってきて、そして一斉に蜂起するっていうのはこういうことなんだな、あるいは、権勢を振ってきた大統領が、いきなり引っ捕らえられて、そして死刑にされてしまうっていうのはこういうことなんだな、ということテレビでウォッチングできた。つまり革命の現実を見たわけでありまして。この革命の現実、今さら私が申し上げるまでもなく、社会主義体制というか、今まで東側と言われてきた国々が、そして絶対に壊れないというふうに見えてたような体制が、あっという間に解体していく過程でありました。権力者、時の権力者はあっという間に地位を失うという、これは、天と地がひっくりかえる、まさにレヴォリューションという言葉どおり、天と地が、上と下がひっくりかえるという、こういうことを実感しました。そして同時にこの年、1989年というのは、1789年から数えますと200年でありまして、フランス革命200年の記念の年でもありました。ちょうどパリで、7月でしたか、8月でしたか、サミットが開かれて、ミッテラン大統領がホストになって、先進資本主義諸国の首脳会議が開かれた。このときちょうど、革命を記念するさまざまな行事が行われまし

た。フランス革命、今から200年前のフランス革命のときに、パリの市民が、ベルサイユじゃなくてバスティーユですが、バスティーユの牢獄を襲撃して、そして武器を取奪しようとした。フランス革命はそこから始まるわけですね。もともとの原因は税金を高くしようということが不満であったわけでありまして、それから始まっていく革命と動乱の数十年、終息するのに20年くらいかかります。このフランス革命が、華々しく国家的に記念される。さまざまなお祭りが行われましたし、そしてテレビでそれも、私たちはこのお祭りをウォッチングできたわけでありまして。

それで、目に見える革命っていうのはこういうものなんだということを、私たちは非常によく観察したわけです。ところが、私が今日ここで申し上げたいのは、こういう目に見える、天と地が、ある日突然ひっくりかえる、制度もひっくりかえる、支配者もひっくりかえるという、こういう革命ですね、武器と血と、それから殺戮が繰り返されるという、人間の命が、たくさんたくさん失われるという、こういう革命も革命であります、実はもう一つ別の、目に見えない革命が、実はじわじわとこの1970年代から今日に至るまで起こっているのだ、ということでもあります。このじわじわと起こっている「見えざる革命」の話を、今日、私はしようと思って来たわけでありまして。英語で言いますとここに書いておきました、Subtle Revolution (サトル・レヴォリューション) というふうに言います。ま、これはアメリカ人が名付けたんですけども、1980年代は「見えざる革命」の時代なんだ。このサトルという言葉の意味合いでありますけれども、これも帰って辞書を引いていただきますと解りますように、「隠微な」とか、「目に見えないけどじわじわと」とか、そういう意味合いであります。「サトル・ポイズン」というふうに言うと、なんていうんですかね、目に見えないけどもじわじわときく毒であります。死に至らしめるような毒のことでありますが、そういうこのサトルというのは、じわじわと、隠微なという意味がありまして、その隠微な革命、あるいは隠れた革命とでも言った方がいいか、そういう革命が、日本だけ

ではなくて、資本主義国で、むしろ社会主義国ではなくて資本主義国を覆いはじめている、始まっているんだ。これは日本を含めた、それこそ先進諸国、サミットをやるような国ですね、サミットに代表が出てくるような、そういう国ではこの革命が広がってきている。私たちは今、その中に生きているのだということを、申し上げたいと思います。

少し具体的に、どんなところでどんなふうにそれが起きているのかということをお知らせすると、一つは、とりわけ企業で起きております。企業、製造業です。物を生産する工場の中での、労働過程の中での大変化であります。これは技術革新、コンピューターだの、情報だのという形で私たちの身の回りに、今や当たり前のごとくに存在しているマイクロ・エレクトロニクス、ああいうものを通して技術革新が進んだ。今まで私たちが労働者だ、工場労働者だという形でいつもイメージできた、まあ私なんかは、昔はチャップリンの映画に出てくるような機械と、それと結び付いた労働者たち、単純な作業をやる、手作業をやる労働者であります、ああいうのが労働者だ、というふうに思ってきました。そういう企業の中で一生懸命に熟練をつんで、そしてその熟練を手掛かりにしまして、労働組合を作って賃金交渉をやって、そして母ちゃんと子供を食わせる賃金を稼ぐ、そういう労働者が典型的な労働者だというふうに思ってきたわけではありますが、大袈裟に言いますと、この1970年代から80年代、大きく言って約25年、小さくとればこの10数年の間に、工場の中から消えてしまった、あたかも小松左京の小説のごとくですね、SFの小説のごとく消えてしまったと言っているのではないかと思います。ちょっと大袈裟に申し上げますとそういうことであります。

これまで権威がある、熟練のある、そして強い組合をもって賃金交渉をする、そうした労働者が工場の中から消えてしまったということ、これは非常に大変なことであります。ところがこれは、毎日毎日の中で少しずつ消えていく。いきなり消えちゃったわけじゃないものですから、私たちは気が付かないでいる。私は3年ぐらい前に、中国から来た研究者のお客さんを連れて

トヨタ自動車へ——大体外国から人が来るとトヨタ自動車へ見学に連れていくわけですが——行ったときにですね、クラウンを組み立てている元町工場を見せてもらったのです。トヨタはいろんな車種があつていろんな車をいろんな工場を組み立てるので、さまざまな、何て言うかな、工場の形態があるのですけれども、このクラウンを組み立てているのはトヨタの一番中心の工場であります。その元町工場を見にいったときに私はもうびっくりしたわけです。非常にでかい工場で、そこで組み立てる、下請の工場で生産された部品を一杯集めて、組み立てていくわけですが、あの1分間に80m走る、80mくらいの速さで走るレールがこうずうっと動いている、その上に、自動車を順番に車台から載せて、車輪を付けたり、ガラスを付けたりして一つの自動車に組み立てていく。何百mかラインを動いていく間に、一つの自動車が出来上がっていく。

10年くらい前に、私がトヨタへ最初に行ったとき、これはロイドン・ハリソンというイギリスの労働党の大先生のお伴をして行ったのですが、このときには、ラインの両ふちにです、せいぜい10mおきぐらいに両ふちに労働者がずっと立って、そしてもう小走りで、ヘッドライトを付けたり、ガラスを付けたり、という形で労働者が、1分間に80m走るそのラインに沿って仕事をやっておりました。1分間でも、とにかくもう、ちょっとでも休めない。そういうふうな働き方をして自動車を組み立てていたのですね。トイレに行きたいなんて誰かが言ったら、そのラインは全部とめないとトイレに行けないという、「トヨタ残酷奴隷工場」と、こういうふうに言われていた、そういう時代の労働者像を、私は頭に置きまして、これは是非、中国の専門家に見せなくちゃいけない、というので連れていったわけです。いきおいこんでね。そのクラウンの組立工場へ行きましたら、もうはっきり言って労働者は1人もいないんですね。組み立てているところには誰もいない、もう全部ロボットに変わっているわけであります。トヨタのクラウンだけが、きっちりとした鉄骨の車体、何て言うのでしょうかね、一番の台のところが鉄でで



きていて、そしてきちっと強い、まあ、ぶつかってもあまりグシャっとならない自動車なんだそうですけど、その台が、まず置かれて、そこからこうずうっと、自動車になっていくこの長いラインに、誰も労働者がいなくて全部それをロボットがやっている。輪っばを付けるのも、フロントガラスを付けるのも全部、機械がやっている。そしてわずかに、労働者はどこにいたかと言いますと、工場の中央の高い所に、窓から見てる労働者がいて、それはコンピューターを制御している労働者です。そのロボットを制御している人たちが何人かと、それから出来上がった自動車を、全部組み立て終わりますと、ガソリンをちょっと入れて動かして、検査のところへもって行って、そして熱をあてたり、たくさん水をあてたり、シャワーをあてたりして、欠陥がないかを調べるらしいのですが、そういう検査の係りの所に労働者が何人かいたというわけであります。そうするとまあ、この講堂の何十倍もある広い工場に、わずかせいぜい数十人の労働者が働いていて、そして昼夜を問わず、そういう工場から、あのクラウンという自動車が出来上がってくる。皆さん、そういうことを一度想像してみてください。これはもうまさにSFの世界でありまして、そういうSFの世界が実は現実のものになっているということでもあります。

私は、専門ではありませんから、そういう所を見に行く機会というのは、あまりなかったのですが、ちょうどたまたま、同じところにYKKというファスナーの工場を見学する機会がありました。富山県の黒部にあるのですが、あの、皆さん、YKKっていうファスナーは、もう世界のシェアのほとんど大部分を占めてしまっているほどに、こう、大きなというのか、独占的な企業でありますけれども、そこを見せてもらったのです。そうしましたら、ここはまたまたすごくて、あのファスナーなんていうのは非常に単純なものでありますから、あれは全部化学薬品の、つまり、合成繊維と合成の何か、要するにプラスチックみたいなものでできてるわけです。つまり薬品からできてるのですね。あまりよく分からないのですが、薬品からできてい

るのです。布だとか、金属などは使っていないわけです、今のファスナーは。工場の中はやっぱり完全にロボット化してまして、大袈裟に言いますと工場の外側にこのファスナーに必要な薬品ですね、合成をするのに必要な薬品のタンクが、二つか三つ置いてありまして、そこから工場の中に入りますと、えたいの知れない機械を全部通っていくと、実はファスナーが出来上がって、ぐるぐるとこう巻かれてるという、そしてその間に、誰も労働者はいないという、こういう構造が出来上がってる。つまり、事ほど左様に労働過程の中から労働者が消えてしまっているということでもあります。

ついでにもう一つ例を申し上げますと、ほぼ同じころにもう一つ工場を見学したことがあります、大隈鉄工であります。愛知県の犬山の近くにある大隈鉄工です。大隈鉄工というのはロボットを造る工場であります。そのロボットを造る工場がロボットでできている。ロボットがロボットを造ってるという、やはりここでもほとんど誰も労働者はいない。ロボットを、つまり昔で言ったら金属加工ですね、金属加工業がロボットで生産されているという状況であります。そしてわずかに労働者がいるのはどこかと言いましたら、ロボットに教え込む熟練、これを忘れないために、やはりロボットに熟練を教えるためには、人間の熟練の経験がいるのだそうでありまして、その経験を維持し、忘れないために、何人かの熟練労働者が自分で旋盤をやっているわけでありまして、あとはもう全部、教えられたロボットが完全にやっていると状況であります。

こういう状況の中で、つまり私たちが当たり前と思っていた労働者がですね、これは男性の、熟練のある、そしてもうちょっと言いますと、熟練を通して、強い労働組合をもち、母ちゃんと子供のために賃金を稼ぐという、「家族賃金」と言いますけれども、それを稼ぐ労働者が忽然と消えてしまったのだ、というふうに言ってもいい。もっとも、日本はロボット先進国でありますから、どこの国も、イギリスなんかは、なかなかそうはいかなくて、労働者が古い熟練を楯にしてロボット化に抵抗しているのですけど、しか

し、そのイギリスでさえ、強さを誇っていた「労働組合会議」、TUCであります。それが解体してしまったという状況であります。労働党も解体してしまいました。これは、こうした技術革新に応じた労働者の変化ということが大きく影響しているというふうに思います。そして同時に、労働者がそこで消えてしまったのと今度は対照的に、他方で別の種類の労働者が増えてくる。これはまた荒っぽい言い方をいたしますと第3次産業の労働者が、この四半世紀に大幅に増えました。サービスです。機械にとって代わることができない、心が関係する部分の労働ですね、気配りだとか、心だとか、そういうことがまだまだ大きく関係する部分、人間の労働として増えているということでもあります。そして、そのサービスにかかわる、心だとか、気配りだとかが問題になるような所に女性の労働者が増えてきている、これも否定しえない事実であります。この、女性の労働力率の増加というの、これはまあ、表をもってくればよかったですけど、大方の統計書には、どれにでもついているものであります。

大体、大まかに言いますと、全体の女性ですね、15歳から64歳までが働ける年齢だとして、その年齢の全女性人口の3分の2近くが働いている。これは、日本ではもうちょっと、まだ低いかもしれませんが、ヨーロッパ資本主義諸国ではそうです。イギリスでも、アメリカでも、フランスでも、ドイツでも、スウェーデンはとりわけ高いのですが、3分の2を基準にしてその前後であります。つまり過半数の女性が働いている、社会的労働についているということです。全人口のですから、病気であったり、さまざまな事情の人を考慮しますともっと高い率になるというふうに思います。そしてその3分の2、全女性人口の3分の2が働いているという中で、この働き方をもう少し詳しく見ますと、働いている女性の8割から9割というのが、パートタイマーであるということでもあります。こうした女性の労働者は、今まで例えばトヨタ自動車に働いていたような、熟練をてこにした男性の労働者と、ちょうど対極にあります。熟練はなくて、あちこちどこでも、必要な

らばパートタイマーで必要に応じて働きに行ける。そういう意味では流動可能な労働者で、しかもパートっていう形の雇用の形態で、女性が働きはじめて、そしてこの数は、どんな不況に遭おうと減らないのですね。景気が悪くなると、パートタイマーが最初に首を切られると、こういうふうに新聞なんかには出ておりますけれども、全体として、結果として見ますと、首になるのは、熟練のある、比較的古い熟練を楯に、高い給料をとっていた男性労働者でありまして、女性労働者、パートタイマーの女性労働者は一貫して増えている、という現実があります。これはイギリスでも、フランスでも、アメリカでも大体そういう状況であります。つまり傾向的な見通しで言いますと、女性の労働者が、しかも今までの男性とは違った形で労働の形態の女性の労働者が増えてきた。パートタイマーという形で、しかも、かつて長い熟練の養成期間がいたりとか、あるいは、高い教育がいたりとか、それから強い団結力を誇るとかというような、そういう、かつての労働者層とはまるっきり違った人たちが、登場してきているということでもあります。

非常に目に見えるような形で、デフォルメして申し上げましたが、今や、こういう状況が広がってる。これが「見えざる革命」の推進力だということでもあります。このことをどう評価するか、いいの悪いのなんて言ってる暇がないわけでありまして、どう評価するかということがとりわけ今、重要な問題であると私は思います。

そういうこととくっつきまして、今度は女性の側の、女性の身の上の話を少しいたします。この10年、日本で言えば約10年、それから、イギリスやアメリカという女性先進国で言いましても約20年ではありますが、大きく言ってちょうど四半世紀、25年ぐらいの間に、女性の身の上、つまりライフ・スタイルが変わってきたわけでもあります。かつて、私が若かった頃ですね、女性の生き方のモデル像というのは、何であったかと言いますと、ここにも、私ぐらいの年齢の方もおられるので思い起こしていただきたいのですが、「幸福な主婦」であったわけでもあります。郊外の一戸建てのマイホーム

で、赤い屋根の、白い壁の、緑の芝生のですよね、そういう所で、犬が1匹いて、子供が2人ぐらいいてですね、夫はフランス語の本を読んで、日曜日ですよ、妻は紅茶を出す、白いエプロンをして紅茶を出す。まあこれがあの、1960年代初めの、若い女性たちのある種の夢であったわけであります。実際には、夫がエリート・サラリーマンでなかったり、あるいは子供が病気であったり、登校拒否であったりですね、一戸建てがもてなくて公団住宅に住んでたりと、夢の一部分がどこか欠けてるわけではありますが、しかし、かつての若い女性たち、今から25年くらい前の若い女性たちの夢というのは、そういう「幸福な主婦」という形であったと思います。そしてそこでは、できるなら給料の高いエリート・サラリーマンの夫のもとで、家事労働、主婦労働に励む、育児と家事を一生懸命やるというのが、女性の出世コースだったわけであります。将来お嫁さんになりたいという女性は、今でも変わらないのですけども、お嫁さんになった先は、こういうことが大体想定されているということが、女性たちの夢であったわけです。

ところがこの夢が、夢でなくなりつつあるということであります。そしてここで、まあ、サザエさん一家の崩壊と言いたいのですけれども、サザエさんというのは、ある種の庶民の、今、私が言いましたような夢を、もうちょっと庶民的にした家族像であります。これが崩壊しはじめました。1982年です、文献目録に挙げておきました斎藤茂男さんという共同通信の新聞記者の方が『妻たちの思秋期』という本を出しました。これはテレビドラマにもなったので、きっと覚えておられる方がいらっしゃるかと思いますけども、これを読んだとき、私は、かなりびっくりしました。今述べたような幸福な主婦像が解体していく現実の第一歩が、この『妻たちの思秋期』でありました。斎藤茂男さんという人は、もともとは、日本人の「働きバチ」男性サラリーマンの実態を調査したくてあちこち歩いていたわけです。調べていたわけですから。そしてエリート・サラリーマンにインタビューやなんか、いろいろしてた。そうすると、エリート・サラリーマンのかなりの人の背後に、つま

り家庭で、家庭の崩壊が起こってる。しかも奥さんがアル中になって再起不能という状況になってる人が、かなりいるということが分かってくる。そして斎藤さんはついに、結局、エリート・サラリーマンの奥さんのほうを主人公にしまして、このルポルタージュを発表したわけです。そしてここでは、例えば大銀行の地方の支店長の夫をもつ奥さんとか、あるいは、かつてはどこかの商社の海外駐在員として、5、6年外国で暮らしたことのある旦那の奥さんとか、こういう人たちが、具体的に登場してくるわけですが、アルコール中毒症状になる。夫たちはエリートなんだけれども、長時間働いて家に帰ってきても、口もきいてくれない。「メシ」「フロ」「シンブン」と言うだけだというわけであります。そして子供たちは大きくなって、母親を相手にしてくれない、寂しい。転勤をしているのできまった友達もいない。こうなりますと、ついつい、台所でお料理のためにというお酒を飲んだのが始まりで、これが人格破壊にまで進んでいくという状況が報告されまして、非常にショックを与えたわけであります。

「幸福な主婦」が幸福でなかったということに驚いているうちに、1980年代の後半です。これは、1987年か1988年か、このあたりであります。NHKで『妻たちの定年』というルポルタージュをやったんですね。これをたまたま見て、私は驚きました。こういうことです。昔は、夫が妻に「三くだり半」を出したわけでありますが、妻が夫に、しかも夫の定年のときにですね、長年、妻や子供のためにサラリーマンとして働いてきて、定年退職をして帰ってきたおめでたいその日にですね、帰ってきたら、奥さんが三ツ指について、私も定年をいただきます、ついては、離婚してください、というふうに言い出すという。これも佐藤愛子や、なんか小説にしていますから、いろいろとお読みになったことがあると思いますけども、女性のほうから夫が定年になったときに、自分も定年にしてください、「主婦」を定年にしてくださいと言ってですね、離婚を申し出る。そして、その離婚した奥さんが、非常にショッキングだったのですけれども、かねてから懸案であった、自分

の実のお母さんを田舎から呼び寄せて、駅前小さなアパートを借りて、そして自分も駅前のデパートの食品売り場でパートとして働いて、そしてお母さんと2人だけで暮らす。こんなに楽しい人生が私にあったとは思えなかった、というふうに生き生きと語るという。これもショックであります。

ここにおられるのは、まだ若い方ですから、忠告しておきますが、女性に対する古い古い考え方をお持ちですと、こういうことが起こりますよ、ということであります。そういう妻たちの定年というのもびっくりしましたら、今度は「夫無用論」という話が出てきます。これは、鹿島敬という、『日本経済新聞』の新聞記者の方が書いたもので、男と女、女と男だったか、ちょっと、どっちか怪しいのですが、タイトルが『変わる力学』という、1989年に出した新書の中です。ここの中で、最近の若い女性たちは、特に職業をもっている女性たちは、夫はいらないけど子供は欲しい、つまり結婚はしたくないけど子供だけは欲しい、というふうな人たちが増えてきたと、つまり「夫無用論」という。かつて、1960年代に梅棹忠夫さんが主婦論争というのを『婦人公論』で展開されたときには、「妻無用論」というのを展開しまして、そして、大方の女性から非難を浴びたことがあるんですけど、今や「夫無用論」ということが、わりと、すんなりと言われる時代になってきたということでもあります。

こういうことに見られますように、家族が崩壊しはじめた。今までは当たり前だと思われてきた、夫婦とそれから子供がいる、まあ1人ないし2人、ないしは3人という子供がいる、単婚小家族であります。あるいは核家族とも言える、そういう家族。あるいは、例えば、社会学なんかでは、これは基本的な、社会の基本的な単位であると思われ、経済学もそういうふう言うわけですね、「家計」とか「世帯」、ここでは、経済学を勉強しておられる方々が、かなりいらっしやると思いますが、経済学の一番の基本はですね、この「家計」「世帯」という言葉で表現される家族であります。この家族というものが解体しはじめてる。解体じゃ、ちょっと大袈裟なら揺らぎはじめ

ているという、そういうことであります。今まで堅い堅い殻で、家族が覆われてきたとしますと、この殻が薄くなって破れかかっているという状況が、現実に今、私が申し上げましたような状況の中で起こってきているのです。そしてそのことを決定的に証明付けて、そして皆さんをびっくりさせたのが、1.50 ショックであります。昨年は、1.53 ショックだと言われていて、その前は、1.57 ショックだったのですが、もう、年毎に減っています。これは何のことだか、お分かりにならない方がいらっしやるんでしょうか。出生率であります。1人の女性が一生涯に子供を産む数が、1.5人ということであります。日本人ですよ。1.5でありますから、全日本の女性が全部子供を産んだとしても1.5人しか産まないわけですから、将来、日本の人口は減っていくという問題です。誰かが試算しましたら、西暦2千何百年、2百年だか百何年だかには、日本の人口は、このままいくと80何人になるとかいう試算をした人がいまして、まあ、このまま増えなければそういうことになる。これをどう考えるかという、「ほっとけ」という説もあるのでありますが、これは日本だけではなくて、日本は異常に早いスピードで減った、2を割ったわけですよ。2.0で大体普通、単純に再生産できるのですけれども、2を割ったわけでありまして。これは非常に、異常に早かった。イギリスなんかは、100年ぐらいかかってこういう状況に陥ってますし、もう、今や、先進資本主義諸国と言われる国では、この2以上の所はないはずであります。スウェーデンは、一番早くこういう深刻な状況に陥って、これを何とかしなくてはというので、スウェーデンの社会保障制度がかなり進むのですが、2を十分に回復しているとはとても思えません。つまり、先進資本主義諸国では家族が十分に機能しなくなっている、こう言えます。家族というのは何をするとおっしゃるか、これからあとで、フェミニズムのところでも申し上げますが、これはですね、経済学的に言えば、子供を産んで育て、そして、会社から帰ってきた夫を気分よく次の日の朝、会社に送り出す。つまり、労働力の生産と再生産という、こういう役割を果すところでありまして。資本主義社会にとって、



絶対に必要である労働力というものを再生産するところ、子供を産むことも含めて、再生産するところだというのが家族であります、これがうまく機能しなくなったということでもあります。

一方、労働過程の中で、つまり工場の中では労働者がいなくなってしまう。これまで典型的だと思われてきた労働者が、いなくなってしまうということと同時に、他方では家族が、家庭としての機能を果さなくなっているという状況であります。これを何とかしなくてはならない。1.50 っていう数字に一番ショックだったのは、政府であります。そしてとりわけ、厚生省を中心に深刻に受け取りました。この 1.50 というのは、もうなんとも仕方がない。この何十年間かは、とにかく人口が減っていく一方だという、深刻な事実があるわけではありますが、これは深刻であるかどうかは、ちょっと議論の余地がありますが、この問題を別にしまして、とにかく深刻に考えているわけであります。そして、深刻に考えた結果が何であるかと言いますと、社会保障を全面的に見直す必要があると、政府は考えはじめたということでもあります。女は家に帰ってたくさん子供を産めと言ったって、今さらどうしようもない。若い女性が働きながら子産み・子育てができる状況を、どうやってつくるかということを積極的に、今や、考えざるをえない状況になってきている。こう政府は、考えはじめたということです。その具体的な実例が、例えば、あの夜間保育所です。保育所へ入れるんだって！ とんでもない！ と思われる方が、きっと、ここにはおられるんじゃないかと思うのですが、「子供は3歳まで、母親の手のところで育てないと、いい子に育たないよ」って、いうふうに言われるんじゃないかと思うのですが、それは今や、とんでもない話になりつつあります。保育所、昼間の保育所じゃなくて夜間の保育所ですね。夜はやはり、労働時間が、サービス産業になりますと多様化していきます。そうしますと、夜働く女性も一杯増えてくるわけで、そういう人たちのために、夜間保育所をちゃんと充実しろ、ということを厚生省のほうが考える。そして、かなり補助金を、それを出す予算を組ん

だんですね。ところが、各自治体は、つまりそういうことを実施する自治体は、まだ認識がおくれている、あまりそのことをちゃんとやらなくて、昨年の予算は余ってしまったという話を、ちらっと聞きましたけど、まあ、そういう状況であります。つまり、家族のほうも揺らいできている。今まで確たるものだと思われてきた家族のほうも、揺らいできているということです。

これは深刻な話であります。学問の上でも、とても深刻な問題が起こってきています。自然科学はちょっと別としましてね、社会科学は、とりわけです。この、家族というのは、社会を構成する基本単位だという形で社会科学の大前提としてきたんですね、今まで。家政学を始めといたしまして、経済学では、「世帯」とか「家計」とかそういう形で、生物学における細胞のごとく、基礎単位だと考えてきましたし、法律の体系もそうです。社会保障体系なんていうのは、その家族が基本単位で成りたっています。あるいは法律で言えば民法の体系も矛盾が明らかになってきております。これは、例えば「夫婦別姓」というような形で、これも、もう実際に法務省が考えざるをえない、法の上での戸籍制度を再検討せざるをえないということが起きています。

そういう状況をひっくり返して、「見えざる革命」というふうに私は言いたいのです。この革命は何を提起しているのか、ということが問題になります。このことを考えるうえでとてもいいのが、「女子差別撤廃条約」であります。先ほど、見える革命、フランス革命 200 年のことを申し上げました。200 年前のフランス革命ですね、1789 年の 7 月 14 日に住民が蜂起するわけですが、8 月 26 日だか 23 日だかに、フランスの国民議会は、あの「人間および市民の権利宣言」という、非常に有名な「人権宣言」を出すわけでありまして。人間は生まれながらにして「自由」で「平等」である。そして社会は、そういう人たち、つまり社会を構成する人間が、税金を納めて共同に政府を維持しなきゃいけない、軍隊もそのために維持しなきゃいけないというようなことが書いてある「人権宣言」であります。このフランス革命から

200年の歴史というのは、この「人権宣言」の人権が世界に広がっていく歴史だというふうに見ることができると思います。しかし、フランス革命の人権と言うときの「人間」というのは、限定された意味をもっていました。日本語は便利なもので、性をあまり表現しませんから、「人」と言えば、男も女も全部入る、老人も、子供も、金持ちも、貧乏人も全部入るという概念のように見えますけれども、フランス革命の「人権宣言」はもうちょっと、シビアにできておりまして、「人」は「男」であります。オム (homme) という、「男」であって「市民」である人間の権利宣言と書いてあるはずであります。これは「女」の権利宣言でなかったんだ。つまりフランス革命の「人権宣言」から女性が除外されていたんだということを、私は不幸にもですね、中学校や高等学校では一度も教えてもらわなかった。ここでは、もう最近は皆さん方は、私よりも幸福であるだろうと思いますから、女が入ってなかったということを聞かれたことが、一度や二度はあるだろうと思いますが、フランス革命の「人権宣言」っていうのは、普遍的な人権を標榜したので、とても有名でありますけども、財産をもたない男性と、女性は、そこから除外されていたということでもあります。そして、この財産をもたない男性にも人権があるよ、ということが、200年かかって広がっていったわけです。そして女性にも徐々に広がっていった。これは女性の参政権の歴史ですね。選挙権をいつどういうふうに獲得したか、というようなことを調べてみれば分かるわけであります。そして、このフランス革命の人権宣言の流れの中で、決定的に、ある意味では質が違うというふうに思いますけども、この流れの中で一段、人権の質を高めたのが、「女子差別撤廃条約」だというふうに私は思います。これも初めて聞かれたという方が、ひょっとして、おられるかもしれません。ニューヨークの国連の総会で、1979年にこの条約が決議されたのです。これは、女性も、男性と同じように人権があるよ、ということが書かれておりまして、差別してはならないということが、書かれているものです。そしてこれを世界の国々が批准をする、これを守りますよ、

という形で批准をするという形をとったのですね。

1985年、中曽根さんが総理大臣のときに、日本の国会もこれを批准いたしました。つまり、日本もこれを守るよ、ということを決めたわけです。そして、それを批准するにあたって、日本の国内にある差別法を改正する。日本国憲法というのは、かなり徹底した男女同権の憲法であるのですが、その憲法のもとにあるいくつかの法律が、かなり差別的なものがあつたわけです。一つは国籍法、日本の男性が外国人の女性と結婚したら、その外国人の女性は日本国籍が取れる。しかし、日本の女性が外国人の男性と結婚した場合には、その外国人の男性は、日本国籍をすぐには取れないという、こういう差別的な状況があつたのを直したわけでありませう。それから、家庭科の男女共習ですね。それから、もう一つは有名な「雇用機会均等法」というのを作つたわけです。労働の機会において、男女の差別をしてはいけないという法律を、1985年の国会に通しまして、そして政府は、「女子差別撤廃条約」を批准したわけでありませう。

この「女子差別撤廃条約」の中で、女性の人権も男性と同等であるよ、平等であるよ、ということが書いてあるわけでありませうが、その中で非常に大きな特徴は、これは第11条に書いてあるのですけれども、一番大きな意味は、女性の人権としての労働権というのが、書いてあるのです。労働権は人権である、権利である、働く権利がある、女には働く権利がある、とこう書いてあるのです。これは非常に重要な意味合いをもつと思ひます。労働権としての人権ということ、人権としての労働権ということ、そこに登場させたということが、この「女子差別撤廃条約」の大きな意味合いでありませう。そしてこの労働権の問題を歴史的に、私は専門家じゃないので、あまりきちんとたどつたわけじゃありませんけれども、労働が権利であるというふうに書いてある憲法というのは、日本国憲法には書いてありますけれども、あまりないんですね。それ以前は、例えばロシア革命のときの憲法でも、労働は義務でありますし、ワイマール憲法でも、政府は国民を失業させない義

務があると書いてあるだけでありますから、労働が権利だ、というふうに書いてある、とても重要なことだと私は思います。

この女性の労働権という考え方は、先ほど申し上げましたように、労働の質の変化とともに、舞台の主役になりはじめました。工場から熟練労働者が消えちゃってるという、こういう、男性の熟練労働者が消えちゃうことと、それから、女性の、サービス産業を中心にしたパートタイマーの労働者が増えてきていることと、結び付いているというふうに私は思います。つまり、労働が権利だというふうに認められたことと、それから、この労働の質の変化ですね、今まで、労働というと一定のイメージがあったわけですが、労働の質が大きく変わってきている。この二つが、「女子差別撤廃条約」の背景になっているように思います。そしてこの「女子差別撤廃条約」は、おそらく20世紀にできたさまざまな権利宣言・権利条約がありますが、その中でもおそらく、非常に画期的なものの一つだというふうに私は思います。

そして、「女子差別撤廃条約」の中でどうしても言っておかなければいけないのは、女性の労働権を認めるとすると、すぐに問題になるのは家庭であります。家庭の中で、とりわけ一番困るのは、困るといふか、重大な問題なのは、子育てであります。「子育ては男女平等よ」と言いながら、やはり、子供を産むというのは女性でありますし、子育てというのは、長い間、女性のものだというふうに、認められてきたものであります。この子育ての問題をどう考えるかということも、この「女子差別撤廃条約」の中にはありまして、子育ては男女平等に、つまり、家庭責任は男女平等にあるのだということが書かれています。これが最近、各自治体だとか、国が、「男女共生社会」というふうに言っていることであります。男の人も家事労働に参加しなさい、家事・育児に参加しなさい、というキャンペーンを自治体が張っておりますけれども、名古屋市などは、積極的にそういうことをやっておりますが、そういうキャンペーンを張る根拠はここにあります。

しかし、私に言わせれば、家庭責任は男女平等にあるよ、と言うだけでは

アンバランスでありまして、先ほどの1.50ショック、あるいは、家族の構造が全体に揺らいできてしまっているということを踏まえて言いますと、子育ての社会的な責任ということが、問題になってくる。これを正面に据えて、現実を考えざるをえない状況になってきているということです。これは保育所の問題だとか、児童手当の問題だとか、具体的にはいろいろな問題がありますが、一括して申し上げますと、社会的な責任というところに、力点が置かれるようにならざるをえないし、なっていくだろうということであり、ます。

## II 現代フェミニズムの展開

### — 「見えざる革命」をささえる思想

大体こんなことが現代の、革命の時代ということの大まかなイメージであります。こうした「見えざる革命」をささえている思想として、フェミニズムがあるということを、あとの後半部分で申し上げたいわけで、このフェミニズムというのは、これも200年の歴史があります。ちょうど昨年、私の属しております社会思想史学会では、「フェミニズム200年」ということでシンポジウムをいたしました。何が200年かと言いますと、メアリー・ウルストンクラフトという人が『女性の権利の擁護』っていう本を、1792年に出したわけでありまして。彼女は、ウィリアム・ゴッドウィンという徹底した合理主義というか、アナキストというか、そういった思想家の奥さんであります。このウルストンクラフトがその本を出して、女性も、男性と同等の権利があるんだ、同等の教育を受ける権利があるんだ、というようなことを言った。それから200年ということでありまして。

このあたりの事情を少しだけ申し上げておきますと、先ほど、フランス革命での「人権宣言」は、男性で財産のある人間が、人間と見なされたのだ、権利があると認められたのだと申し上げましたが、その中で、男性に権利が

あるなら女性にも権利があるはずじゃないの、という考えが女性の側から出てきます。男性のフランス革命の人権宣言をそっくりそのまま模して、全部女性に置き換えた「権利宣言」を発表した人間がいるのです。これがオランブ・ドゥ・グージュというおばさんでして、このグージュっていう人が、『女性の権利宣言』というのを書きました。そしてそこで彼女は勇敢にも、女性も男性なみに、一切のものが同じ権利がある、そして処刑される——つまり刑罰を受ける権利もあるのだということを言うわけでありました。納税することも権利があるし、刑罰を受ける権利もあるんだということを、グージュは発表したわけです。そして、フランス革命の大混乱の中で、ロベスピエールに結局、彼女は処刑されてしまうというようなことがあるんですが、ちょうどこの時代から数えて、約200年であります。フェミニズム200年、そしてこのフェミニズム200年の中で、現代フェミニズムが、今、私が申し上げましたような社会的・経済的状况の中で生まれてきている。この現代フェミニズムの発展した筋道を少し申し上げて、そしてその筋道でそれが一体、何を問題にし、そしてこれからの社会をどういうふうに考えようとしているのかということをはっきりとするというのが、後半部分の私の主題であります。

フェミニズム200年の中でも、とりわけ現代にかかわる部分を、現代フェミニズムというふうに名前を付けておくとしますと、フェミニズムという思想は、大体、二つの段階に大きく分れると思います。第1段階は、1960年代であります。とりわけ文献目録に挙げておきました、1963年がありますが、アメリカのジャーナリストであるベティ・フリーダンっていう、よくご存じの方もきっといらっしゃると思いますが、この人が『フェミニン・ミスティーク』という本を書いたわけでありました。これは翻訳されて『新しい女性の創造』というタイトルで出版されておりますけれども、このベティ・フリーダンが1963年にこの本を書いて、非常に、これがアメリカの女性たちの共感を呼んで、そして多くの女性たちがこれに賛成するわけです。どういうことを主張したかと言いますと、アメリカの女性たちは当時、非常

に保守的になっていて、「幸福な主婦」になることを願望し、それを実践していました。それに対して、家庭ってというのは強制収容所だ、っていうふうにフリーダンは言うのですね。強制収容所としての家庭から女性が解放されるべきである、社会に出よう、というふうに言ったわけです。天気がいいから書をもって外へ出ようという、こういう話とよく似ているのですが、家庭の中で閉じこもって家事労働をやっていないで、社会に出よう、ということをやったわけでありまして。そのことが非常に大きな共感を呼んで、これがいわゆる NOW という全米女性会議をつくる出発点になるのです。そしてベティ・フリーダンは1960年代アメリカの、女性運動の中心人物になっていくわけでありまして。今のあのフェミニスト——クリントン夫人の出自もこちら辺にあるというふうにお考えいただくと分かると思います。

この1960年代の初めぐらいから、次第に、先ほど申し上げましたように、女性の労働が変わっていくということと裏表になっているのですが、こういうフェミニズムの思想が広がっていく、つまり最初は、家庭の中に閉じこもっている主婦は外へ出て働こう、社会の空気を吸おうという、こういう運動から始まっていくということです。そしてそこからさまざまな人が、いろいろな仕事を展開いたします。そこで明らかにされたことは何であるかと言いますと、今まで女性の「居場所」、女性が人生を過ごす場所は、家族ないしは家庭とされてきました。この女性の「居場所」としての「家族」というのは、一体なんだということを構造分析する、明らかにしていくということが始まったということです。

男性の方はずるいですから、「家族」というのは女性におまかせっていうことで済ませてきました。例えば、マルクスは『資本論』の中で、家族の重要性について、よく言っていました。労働力商品の再生産の場所として、経済原論をおやりになっている方はよくお分かりのとおりであります。その「家族」というものは、労働力商品の再生産の場所として、つまり子産み・子育ての場所として重要で、それは女がやってるということは分かっているの



ですけれども、マルクスはここについては、あの膨大な『資本論』の体系の中で、「家族」の分析は少しもしてないのです。「家族」は一つのブラックボックスとして、もう当然だとしているのであります。女は、女として生まれてきた生物学的な特性をもってるから、家事労働をやって、子育てやるのも当然だという前提で、「家族」を大前提にして、それはもう分析しない、これはもう、所与の条件である、与えられた条件であるというふうにして『資本論』の分析をしております。

労働力というのは、ものすごく決定的な、資本論の中では決定的な意味合いをもつファクターであります。この労働力がどうやって、どこから出てくるか、作り出されるかということは、マルクスは、あまり関心をもたなかったわけでありまして。従来の経済学が大体、そのマルクスの系譜をひいております。マーシャルなんていうのはもっと明確に、マルクスに対抗的な意識をもって言ってるわけでありまして、「家族」というのは女性の領域で経済学の対象ではないと考えていました。そういうものとされてきた家族を、初めて構造分析するようになった。これがジュリエット・ミッチェルであります。ここの、岐阜経済大学の佐野健治先生が訳された、これは非常に早い段階に訳されたものであります。ジュリエット・ミッチェルのいわゆる『女性論』という、合同出版から翻訳されて出てるものがそれです。私はこれを読みまして非常に感銘しましたし、1973年の段階で既に訳されているというので、岐阜経済大学は、フェミニズムの最先進大学であるのではないかと思ひこんでおりましたけれども……、そのミッチェルが、一番最初に発表した論文が、1966年『女性——最も長期にわたる革命』というタイトルの論文であります。ここの中で初めて、家族というのは何をするとこなんだ、これは母性ですね、子供を産む、それからセクシャリティ、セックスをする、それから3番目に子育てです。子供の社会化というふうに言うのですけど、子供を育てる、子育て、これが家族の中心的な役割で、それを女性が担ってるんだ。そういう家族をですね、外側から、男性の生産、男性の居場所

である生産，ものの生産が包みこんでるという，こういう構造的な分析をミッチェルがするわけであります。そして，このミッチェルは，それまでの社会学の理論，タルコット・パーソンズやなんかの考え方を手掛かりにして，今述べたような構造分析をいたします。

家族というのは結局，女性の「居場所」としての家族は，男性による抑圧を構造化した所なんだ。家族は女，社会は男，こういう性によって分業の体制が仕組みられていて，その中身というのは，今言いましたように，子産み・子育て，セクシャリティという内容を担うのが女性なんだということを明らかに示して見せてくれた，という点では非常に，なにか，今から見ると当たり前前の話なのだけど，とても新鮮であり，ショッキングであったわけであります。そしてこれ以後，1960年代の後半以後，70年代にかけまして，この家族——女性を抑圧する，男性が女性を抑圧する場所としての家族ということできざまな分析，きざまな仕事が出てきます。これを「家父長制」，男性が女性を抑圧するという意味合いで，家族を「家父長制」ペイトリアーキーという用語で表現するようになります。

これは，かつて使われていた封建的な「イエ」制度を意味する「家父長制」というのとは違いまして，フェミニストたちが使う場合には，男性が女性を抑圧する構造としての「家族」という意味合いであります，そういう概念を生み出してくる。そして，その「家父長制」がなぜ生まれてきたのかということ，心理学的に分析したり，社会学的に分析したり，法的に分析したりというきざまな仕事が発表されます。そしてとりわけ女性のセクシャリティを抑圧する場だという形で，いろいろな人たちが家族を問題にしはじめます。それが例えば，ケイト・ミレットだとか，ファイアストーンだとかいう，文献目録に挙げたものが，そういう分析にのっかった，非常にラディカルなフェミニズムの思想を展開します。関心があったら是非，翻訳がありますので読んでいただきたいと思います。こういう人たちがいわゆるラディカル・フェミニストと呼ばれる人たちで，日本にも大きな影響を与えており

ます。そして性を、男性に対して従属する性を、セクシャリティを否定するとか、現在で言うセクシャル・ハラスメントの問題だとかいう、主として、男性と女性の個人的な関係のところを問題にしていく、そしてそれにまつわるさまざまな問題を告発していくという流れが生まれてきます。

それから、もう一つの流れは、家族の中で女性がやってる家事労働が問題にされはじめます。1970年にイギリスで創立されました社会主義経済学会という学会があるんですが、とりわけマルクス経済学を研究する所でありますが、その社会主義経済学会で、1970年代の初め頃に家事労働論争が行われます。家事労働は価値があるかないかということをめぐりまして、大論争が展開されるということです。日本からは、えらい経済学の先生たちが、よくこのイギリスの社会主義経済学会に出かけていくわけであります。しかし、ついぞ一度も、この社会主義経済学会でいろいろな女性問題に関する議論が行われたという紹介がなされたことがないという、非常にアンバランスな、外国からの学問の輸入の形態がありました。それは別としまして、家事労働の経済学的な分析がこの学会で行われました。しかし、この家事労働を経済学的に分析してもあまり意味がない、と言うと怒られそうですが、フェミニズムの理論上は生産的でないですね。日本では、家政学が、この研究を大体、担っておりまして、家事労働はいかに意味があるか、役に立つか、いかに愛情を込めて廊下を拭くとピカピカ光るか、というような議論まで行われました。家政学というのは大変古い学問で、私が所属している大学はそれを教えているんですけども、そこで、かつて良妻賢母主義の教育を受けたおばあさまたちがそういうことを言っているなら、まあまあ、仕方ないなあ、とも思うのですけれども、若くて意気のいい、勇ましい、ラディカルな男性たちが結構そういうことを言う。女性が社会に働きに出るのは「疎外」されるだけなんだから、そんなことをしないで、心を込めて家事労働をやれば、料理もおいしいし、人間らしい生活をとりもどせるというようなことを言うわけであります。そういう議論では、今のこの「見えざる革命」、変革

の世の中に対抗できない、対処できない。時間がないので詳しくお話しすることはやめますが、これが主として、第1段階のフェミニズムの仕事であったというふうに思います。

それに対して、第2段階はさらにこれがもう一つ発展しまして、1970年代の末ぐらいから1980年代を通して、新たな形のフェミニズムの理論が提起されます。その代表格が、ここに挙げましたヴェロニカ・ビーチという人とミシェル・バレットや、メアリ・マッキントッシュという人たちであります。彼女らの仕事といたしましては、この文献目録に挙げておきました。ビーチは最近、私が高島さんと翻訳しまして出版しましたが、もっと勇ましいのは、バレットとマッキントッシュの『アンチ・ソーシャル・ファミリー』（反社会的家族）で、きわめてラディカルなものであります。この2冊は、現代フェミニズムの第2段階の指標になるような仕事であるだろうと思います。

なぜかということをお申し上げますと、ここで初めてビーチは、先ほど申し上げましたような、大量に社会に登場してくる女性の労働者の問題、これを正面に据えて分析し、それを理論化しようとした。とりわけマルクスの資本論との関係で理論化しようとしたと言えます。ミシェル・バレットらは、マルクス経済学の中における「家族」は一体どういう意味をもっていたのかということをお、フェミニズムの側から明らかにする。そして家族は「家族賃金」という形で表現されていると彼女らは言います。これは「家族が食える賃金」という考え方が問題になります。むかし、総評というとても強いところがありまして、春になると賃上げの統一ストライキをやったわけですが、そのときに「家族の食える賃金」というのは非常に大きなスローガンの一つになっていたわけです。つまり、労働者にとっては、これは絶対に笑ったり、否定したりすることはできない、神聖な、信仰箇条みたいな、そういう神聖な「お題目」であったわけですが、この「家族賃金」のもつイデオロギー性、男性主義的なイデオロギー性、ということをおこのミシ

エル・パレットらは批判をするわけでありませう。

これは先ほど申し上げました「家族」が揺らいできた、「家族」の構造全体が揺らいできたということと、くっついているわけでありませう。大体、「家族の食える賃金」と言ったってですな、今の世の中、男性が稼いでくれるだけで家族を食わしていただけるか、こういう普通の現実的な問題をたててみればお分かりのとおりでありませう。奥さんがパートタイマーで働いてこない、稼いでこない、子供の教育費は出せないという現実でありませう。大体、教育費ぐらいを、高等学校から大学に行く教育費ぐらいを、あるいは、子供の塾に行くお金ぐらいを、今の日本の女性は稼いでる、パートで稼いでる、主婦免税額 100 万円以内の稼ぎというのはそういう形になるわけですが、それはもう、既に「家族賃金」が解体してるということでありませう、子供と妻を食わしていけない男性の賃金、これはまあ、男の沽券がますますなくなるということでもありますが、その「家族賃金」が解体してきてる。とりわけ、イギリスの話です、今日、イギリスの労働者の条件というのは目を覆うがごとく悲惨な状況になっておりませう。失業者はものすごく増大し、あれほどの強さを誇った TUC という労働組合会議は弱体化し、労働党も解体し、そしてついに昨今は、最低賃金制が撤廃されるというようなことまでニュースになりつつあるわけでありませうが、そういうことの象徴として、その「家族賃金」というもののもつイデオロギー性が問題だったんだということでありませう。これはセクシズムの構造、つまり労働組合運動におけるセクシズムの構造とくっついていた、非常に明確にくっついていたんだ、ということが明らかになります。それは何かと言いますと、イギリスには、とりわけ非常に強い労働組合がありました、この労働組合の中で労働者たちはどうしたかって言うと、なるべく余分な人間が入らないようにして、数を少なくして、熟練を楯に、団結力を誇って賃上げ闘争をやる。これは排除の思想でありませう。不熟練労働者を排除するという思想です。とりわけ女性などは組合に入れられないという、イギリス労働運動の歴史を研究しますと、たくさ

ん、そういう例が出てくる。労働者の広範な団結の歴史なんていうのではなくて、労働者の排除の歴史、排除と差別の構造の歴史であります。そういうものとくっついて「家族賃金」が要求されるのであります。実際に「家族賃金」をイギリスで獲得できた労働者がどのぐらいいたかということですが、大きく見てもっていわゆる労働貴族、全労働者階級の10%ぐらい、1割ぐらいがまあ、母ちゃんも子供も食わしていける賃金を獲得してたんじゃないか——19世紀のピクトリアの繁栄の時代ですよ——という計算があります。

こういうことの結果、例えばビーチは何をしたかと言いますと、先ほど言いましたが、女性が、家族と社会っていう形で性役割分業を、つまり家族をかかえてる女性が、実は働きに行かざるをえない。家族をかかえてパートタイマーで働くという形で、女性の、社会の中での労働力のありかた、女性労働のありかたも一つの性別の分離の構造、差別構造がなりたってる。先ほどご紹介がありましたように、男性の中心労働、熟練のある男性の中心労働、その周辺を、縁辺を、フリンジを、女性の、あるいは外国人のというのが、ほんとはあるんですが、そういう労働がこう取り巻いている。劣悪な労働条件、安い賃金という、こういう構造を作り上げているというわけでありませう。そこのところを、やはり問題にしなくてはいけない。社会の中における性別分離の構造を問題にしなくてはいけない、ということをビーチは主張するわけでありませう。

### III 「見えざる革命」が切り開く地平

#### —— 21世紀への展望

もう時間もだんだんなくなりましたので、あとは早口に、このレジюмеに書いてあることを申し上げますけども、この現代フェミニズムが到達した地点は何かと言いますと、今言いましたように、性役割分離の構造、つまり

「家族」と「社会」という分割の構造を一つ、問題にする。と同時に、社会の中での性別職務分離を問題にする。この性別職務分離には、垂直型分離、係長や課長は男だけど、ひらは女という、こういう職務における垂直の分離と、それから看護婦さんは女だけど医者には男という、こういう職業によって違うという水平分離、この二つの分離の構造がある。これを明らかにしながら、そこのところで、どうしたらいいかを考えていかななくてはいけない、ということを行ったわけであります。ここから、ピーチは非常に革命的なことを言うわけでありますが、労働力の将来の形態についてです。これは男性も、女性もですが、男性の労働力を含めまして、今は、熟練があって強い団結力を誇るフルタイムの男性労働者がモデルだというふうにされているけれど、これは解体するんだ。これは、先ほど言いましたように、労働過程から男性熟練労働者がいなくなるという話を含めますと現実味をおびてきます。そしてモデルの労働者、中心の労働者が、パートタイマーの不熟練の労働者になっていくという、こういう状況が起こってくるだろう。それを正面に据えて考えてみたときに、女の労働はおまけだというふうに思われて、ほんとは働かないほうがいいんだけど働かなきゃならない、これはおまけだから仕方がないという、こういうとらえ方ではなくて、正面に据えて考えたときに初めて、労働運動のありかた、あるいは社会保障のありかた、そして女性の解放が本当に問題になるというのであります。フェミニズムの思想で言えば、女性の労働権を確立していくという、そういうありかたも変わってくるだろう。また、男の働き方です。男もどうせというのはおかしいのですが、あの男性労働のほうも、統計的にはここ10年くらいの間、とりわけ諸外国では、男性のパートタイマーも増えております。かなり急速に増えているのですね。グラフに書き換えてみますと分かりますけど、かなり男性と女性のパートタイマーの率が接近する、ということであります。つまり、男性の労働のありかたもパートタイマー化していく。このことを正面に据えてどう考えるか、ということが非常に重要な問題であるのだろうということでありま

す。

そして最後に、ここの文献目録に挙げておきました加藤寛『経済は変わった——不況を生き抜く発想と戦略』について触れておきたいと思います。これは非常におもしろい本であります。加藤さんは、国鉄を合理化しJRにしたという代表的理論家でありますけれども、この中でとてもいいことを言っております。不況を生き抜くための経済は、なんであるかということ言ってるわけですが、みんなが働く時代にならなくてはいけないと言うのですね。みんなが働くというのは何かと言いますと、女性が働いて、生き生きと活躍する時代になるはずである。そしてついでにです、ついでに言うとう怒られるかな、高齢者です、高齢者の労働権も確立する、そうは言っていないのですが、高齢者も働く時代になるだろう、ついでに障害者も働く時代になるだろう、ということです。つまり、みんなが働いて生きるということが実現する社会をつくっていくということが重要なんだと、加藤さんは言ってるのですが、これが、日本経済が生き延びる道であるというふうに言ってるのです。これは二つのことが問題であります。一つは、女性も、高齢者も、障害者も働く。つまり労働の質の内容ですね。労働の質が大きく変わっていく。これは、従来はものすごい熟練がいて、何十年と働かなくて、カンやコツがあるので、あるものができないという状況からロボットに変わっていくという条件を後ろだてにして、そして、どういうふうに労働の質が、障害者がやっても、女性がやっても、有能な男性がやってもです、なんて言うともた怒られそうですが、誰がやっても同じ仕事ができるか。労働の平等ということでもあります。同じ時間だけ働けば、同じような仕事の結果ができる、なんて、夢のここのように聞こえるかもしれませんが、そういう状況がどういうふうにできていくか、ということが問題になるだろうし、どういうふうにつくっていくかということが、つまり労働の平等の条件をつくる、これが基本的に問題になるだろうと思います。そうしますと、みんなが働いて、みんなが同じような、同じようなというのは、種類は違うけ



れど、労働の質として言えば同じような仕事をして、という社会が、例えば、最後のこの『見えざる革命』が切り開く地平」といろいろ考えてここに書いておきましたけど、勝手なことを言いますと、21世紀への展望はそういうことでもあります。

最後の、「労働は発達であり、喜びである」とか「労働は仲間づくりである」とかいうのは、これはアダム・スミスを若干敷衍した話であります。1970年代以来、日本の思想界では、マルクスの疎外論が一つのパラダイムとして力をもってきました。資本主義社会で賃労働者として働くと、疎外されて人間的でなくなる、お互いに敵対する、金銭関係によって人間と人間は敵対的になる、物と物との関係になるというのは、これは資本主義社会の矛盾をとらえるために非常によく知られた考え方でありました。しかし、同時にそれは、確かにうそだとは言いませんけど、同時に資本主義社会というのは、アダム・スミスが言っているように、分業が拡大していき、人間と人間の関係が、見知らぬ他人、世界のすみずみの見知らぬ他人と、対等・平等に関係をとり結ぶ、商品を通して対等・平等に関係をとり結ぶ。そしてそれが、平等な労働、等しい労働を通して対等の関係を取り結んでいくんだということが、実現できるようなことにもなるはずであるということでもあります。「見えざる革命」が切り開く21世紀の社会はこうしたパラダイムが現実を実現する社会である。そういう社会にしたいなと思います。ちょうど時間もきましたので、私の話は、これで終わりにさせていただきます。